

香港M+との協働により実現

国立新美術館、企画展「時代のプリズム」開幕

国立新美術館は9月3日より、企画展「時代のプリズム…日本で生まれた美術表現 1989-2010」を開催している。

同展では、昭和が終わり、平成が始まった1989年から、冷戦の終結とグローバル化の進展によって、国際的な対話が広がりを見せた2010年までの21年間に於いて日本で生まれた美術、発信された表現に焦点を当て、21年間の時系列で振り返るのではなく、「プロローグ」「イントロダクション」に続き、時代のテーマに基づく3つの章に分けて作品を紹介。1章「過去という亡霊」では戦争や被爆へのトラウマ、戦後問題に向き合い



あいさつする逢坂館長



あいさつするラファエル館長

続ける探究を表現した作品群を、2章「自己と他者」とではアイデンティティやジェンダー、文化的ヒエラルキーを問う作品群を、3章「コミュニティの持つ未来」では既存のコミュニティや新しい関係性の構築に可能性を探る作品群を取り上げている。

同展は、アジアの現代視覚文化(ヴィジュアルカルチャー)のグローバルミュージウムである香港のM+との協働キュレーションにより実現。国内外から50以上のアーティストが参加し、その実践を検証するとしている。

9月10日には、特別内覧会・レセプションが開催され、国立新美術館の逢坂恵理子館長やM+のスハニー・ラファエル館長のほか、同展に参加したアーティスト等が登壇した。

冒頭、逢坂館長は「3年間の準備期間を経て、国立新美術館とM+の協働によって、本展を実現できたことを、本当にうれしく思う」と述べるとともに、ラファエル館長をはじめ、参加アーティスト、両館の関係者への感謝を述べた。また、ラファエル館長は「国立新美術館との協働は、日本美術に関する両館の専門性を共有し、日本現代美術の近年の歴史を見直す新たな視点を提供するものだ」として、同展開催に至るまでの経緯や想いを述べた。会期は12月8日まで。



「時代のプリズム:日本で生まれた美術表現 1989-2010」国立新美術館 2025年 展示風景